

西洋中世末期のタピスリーにおける鷹狩り図像の変遷

— 『15世紀トゥレーヌにおける王家のたのしみ』展を機に—

高木 麻紀子

はじめに

15世紀のフランスは、イングランドとの百年戦争、黒死病の感染爆発、ヴァロワ王家の内部抗争と、あらゆる面で危機的状況にあった。しかし王侯貴族たちは、そうした時局と逆行するかのようには綺爛豪華な宮廷文化を成熟させていった。その重要な舞台の一つとなったのが、ヴィエンヌ川を見下ろす小高い丘に建つシノン城である⁽¹⁾。「王家の要塞」との異名をもつこの無骨で大規模な城こそ、のちにフランスを勝利へと導くこととなるジャンヌ・ダルクが、未来のフランス王シャルル王太子と初めて謁見を果たした場所である。この城のすぐ足元に佇むル・カロワ美術歴史博物館で、2023年の春から晩夏にかけて、『15世紀トゥレーヌにおける王家のたのしみ』と題した展覧会が催された。トゥレーヌ（仏：Touraine）とはフランス中西部に位置するこの地の旧名であり、特に1420年にパリがイングランド王ヘンリー5世によって占領されると、フランス王家と周辺貴族の新たな居住地として重要性を増していった。今回の展覧会は、ヴァロワ朝第6代フランス国王ルイ11世（在位1461-1483）の生誕600年を寿ぐイベントの一つとして、まさにその頃のトゥレーヌで花開いた宮廷文化にスポットを当てており、そのメイン・ヴィジュアルとして白羽の矢が立ったのが、1440-1450年頃制作のタピスリー《鷹狩り》（ソミュール城美術館、ノートル

ダム・ド・ナンティイー教会からの寄託品; fig. 1; 作品番号⑨; 以下、本作）である⁽²⁾。これまで本作は、主に15世紀第2四半期から中葉にかけて織られた大型タピスリー連作《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》（ロンドン、V&A美術館; 作品番号⑦-1, 2, 3）との関連から言及されることはあったものの、美術史学の領域で個別的研究対象となることはほぼなかった⁽³⁾。この展覧会で本作はどのような文脈で取り上げられたのであろうか。新たな情報や知見の提示はあったのだろうか。本稿は、本作の基本情報を押さえたのち、展覧会の取り組みを概観し、その上で西洋中世末期のタピスリーにおける鷹狩り図像の変遷という観点から本作の図像に関して若干の考察を試みるものである。

1. 基本情報と研究史

本作の基本情報と研究史を明らかにするまえに、まずはタピスリーとは一体どのような芸術媒体なのかを簡潔に解説しておこう⁽⁴⁾。西洋中世の時代、アルプス以北の地域で独自の進化を遂げたのがタピスリー（仏：tapisserie）である。この用語は単に壁掛けを意味する場合もあるが、今日では麻や羊毛の経糸に、染色された羊毛や絹、ときに金銀糸による緯糸を絡ませて図案を織る平織の織物を指すことが多い。既に中世盛期にはその制作が行われていたことが同時代記録から確認で

き、特にフランスおよび南ネーデルラントでは14世紀以降に飛躍的な発展を遂げた。最初に中心的な生産地として栄えたのはパリであったが、百年戦争後期のアザンクールの敗戦（1415年）を境に斜陽のときを迎えると、15世紀中葉以降はヴァロワ・ブルゴーニュ公家のパトロネージのもと、南ネーデルラント諸都市が精力的な製織地として活況を呈していった。本作は、まさにこの頃の南ネーデルラントで制作されたと推察される作例である。

基本情報

19世紀中葉、ソミュールのノートルダム・ド・ナンティイ教会の所蔵品として初めて歴史上に登場した本作は、長い間、美術史家に注目されることもなく、基本的な情報も不明なままであった。信頼に足る詳細な情報がようやく発表されたのは、ソミュール市の念願のタピスリー・コレクションのカタログが刊行された2020年のことであった⁽⁵⁾。これに基づくと、本作の素材は羊毛と絹であり、1センチメートル辺りの経糸の本数は6本と質の高さが窺える。本作のサイズは縦が約1.6メートル、幅が約2メートルと小型であるが、これは完成当初のサイズではなく、大型タピスリーの上部の一部を成していた断片と考えられている。また、中世末期の現存タピスリーの多くがそうであるように、本作も数度の修復を経ており、直近では2009年に詳細な現状調査と修復作業が実施されている。このとき右上隅に織り込まれていた紋章（fig. 2）が、後世の追加で図柄とも合っていないと判断され、入念に取り外されている。2020年のカタログで本作の解説を担当したシャロンは、この紋章と推定制作年代を基に、ジャック・ド・ディナン=モンタフィラン（仏：Jacques de Dinan-Montafillan）というヴァロワ

王家の執事長を務めた人物を導き出しているが、この紋章部分が本作のオリジナルに由来するものなのかは不明なため、結局のところ制作経緯や最初の所有者は判然としない。また、このカタログにおいても下絵制作者は不明とされ、製織地に関しても南ネーデルラントと推察されてはいるものの、特定の都市名を挙げることは避けられている。とはいえ、上述の紋章断片の存在から、タピスリー芸術をこよなく愛し、その熱心な保護者でもあったヴァロワ王家と近い人物による注文品と本作が、一時期、同じ場所にあったことは間違いなく、筆者は本作の制作および所有にも、ヴァロワ王家周辺の特権階級に属する人物が関わっている可能性が高いと考えている。

図像とその解釈

本作は断片の状態となつてはいるが、その図柄は明白に宮廷人による鷹狩りを示している。男性4人、女性2人、計6人の登場人物は、皆揃って馬に乗り、たつぷりと布地を使った豪華な衣裳が彼らが属す階級を顕示している。これらの人物群は画面下から上へと積み上げられるかのように密集して配置されており、最上部には葉の生い茂る森が覗いている。つまり、画面構成法としては、画面の高い位置に地平線を設定する平面的な地面を基盤とした所謂〈綴れ織り風景〉が採用されているといえよう⁽⁶⁾。一方、登場人物たちが鷹狩りに興じていることは、特に以下の2点の細部描写から確認できる。1点目は、画面下段の朱色のシャブロンを被った男性が、鷹狩りに使用する猛禽類の頭部に装着する帽子を、右隣の貴婦人に渡そうとしている点（fig. 3）。2点目は、画面左上に、ジェット（仏：jet）と称される革製の紐を足に着けた猛禽類が、サギと思いき水鳥を今まさに捉えようとしている描写がみられる点である（fig.



fig. 1 《鷹狩り》，南ネーデルラント，1440-1450年頃，タピスリー，158×209cm，ソミュール城美術館（ノートルダム・ド・ナンティイー教会からの寄託品）

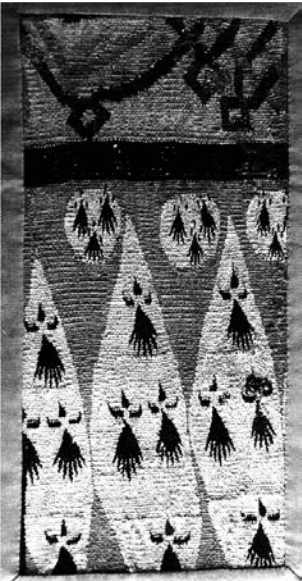


fig. 2 ディナン=モンタフィランの紋章，タピスリー，ノートルダム・ド・ナンティイー教会



fig. 3 fig. 1の部分拡大図

4) ⁽⁷⁾。中世末期の世俗主題のタピスリーにおいて、本作のような鷹狩りを含む狩猟場面が人気を博していたことは、王侯貴族の財産目録や支払い帳簿から確認することができるものの、残念ながらその多くが失われてしまった。よって本作は、その貴重な現存作例の一つである。しかし本作は、著名な連作タピスリー《デヴォンシャーの公の狩猟タピスリー》が取り上げられる際に、狩猟をテーマとしたほぼ同時代の作例として紹介されることはあったものの⁽⁸⁾、それらの現存作例との具体的な比較分析にまで踏み込まれたことはなく、モノグラフィックな研究対象となったことはほぼなかったとっていいだろう。こうした状況のなか、本作の図像に関して留意すべき指摘をしているのがシャロンである。彼は、本作の図像は、鷹狩りを男女の恋愛のテーマと結びつける中世の宮廷文化に属するものであり、本作の男性が猛禽類の目隠しとして利用する頭巾を女性に渡す行為は、愛の対象に対して盲目であることを示すのではないかと推察した⁽⁹⁾。確かに、中世末期の世俗美術の領域において、しばしば狩猟は「愛」のテーマと結び付けて表されており、本作の図像に対するシャロンの読み解きは一定の説得力をもつといえる⁽¹⁰⁾。ただ、シャロンの言及はごく簡潔なものであり、中世末期のタピスリーにおける鷹狩り図像の変遷や、その系譜における本作の位置づけは未だ吟味されていない。果たして今回の展覧会は、本作をどのような文脈で取り上げたのであろうか。まずは展覧会の概要をみてゆくことにしよう。

2. 『15世紀トゥレーヌにおける王家のたのしみ』展の概要

この展覧会は2023年4月8日から9月17日まで、パリの南西、トゥールから約50kmの位置に

ある街シノンのル・カロワ美術歴史博物館で開催された (fig. 5)。本作が出品されることを事前に把握していた筆者は、閉幕間近の9月初旬に訪問することが叶った。残念ながら展覧会図録は作られなかったものの、受付では、会場内の解説パネルのテキストが纏められた冊子と、本作が全面にレイアウトされたチラシが配布されており、特にチラシ裏面には展覧会の概要が端的にまとめられている点で貴重であった。それによると本展は、15世紀における王の巡行と宮廷生活にスポットを当てる試みであり、ヴァロワ朝第5代フランス国王シャルル7世 (在位1422-1461) が実際に三部会⁽¹¹⁾を開催した広間が展示会場となっている点が見処の一つのようであった。なお、ここでいう巡行とは、王が恒常的な居城を定めることなく一族と大勢の家臣を引き連れて所領や各地に存する城を巡ることを指し、ヴァロワ朝の歴代の王たちも終始旅をしながら統治を行っていたのである⁽¹²⁾。

展示会場は1階の「三部会の間 (仏: Salle des États généraux)」と、2階の「四つ辻の間 (仏: Salle Le Carroi)」に分かれており、特に1階展示室に本作を含む中世美術の優品を見つけることができた。まず特筆すべきは、展覧会のチラシにも書かれていたように、会場として使用された「三部会の間」が、シャルル7世が1427年、1428年と2度に渡って三部会を開いた場所であったという事実であり、15世紀のヴァロワ王家宮廷の往時を偲ぶのに最適な舞台となっていた。

各展示室は各々三つのパートから構成され、パート毎にテーマカラーが決められていた。第1会場では、展覧会のイントロダクションにあたる「15世紀トゥレーヌの状況と王の巡行について」が紫、「慣習と象徴によって象られた王の食卓、宴会、入念に演出された余興」が赤、「狩猟、王

家の伝統行事」が緑、「宗教的義務、日々の儀礼」が青。第2会場では、「ダンスと音楽」が青、「馬上槍試合とジョスト」が赤、主にチェスを取り上げる「宮廷の遊戯」が緑、という具合である。この工夫により展示室が手際よく分けされると共に、展示品がどのパートに属するのかが視覚的に理解し易くなっていた。また、この計六つのテーマは、当時の王宮の実態を浮き彫りにするための諸要素を満遍なくカバーしている印象を与えていた。

一方で、展示作品に注目すると、美術史の視点からはやや物足りなさを感じた。というのも、15世紀フランス王家に直接関連する作例はむしろ少なく、また決して質が高いとはいえないものも含まれていたのである。例えば「慣習と象徴によって象られた王の食卓、宴会、入念に演出された余興」のパートでは、王家の食卓を模して15世紀あるいは16世紀の陶器の皿や合金の燭台がテーブルに並べられていたが、制作地はスペインや不明のものも含まれ、また椅子も中世風のスタイルで後代に制作されたものであり、あくまでも当時の雰囲気再現の小規模な域に留まっていた。そうしたなかで、第1会場入ってすぐの台に置かれた象牙製の小箱は、良好な保存状態と彫りの技術の高さから精彩を放っていた (fig. 6)。作品キャプションによると、この小箱は14世紀末から15世紀初頭にかけて北イタリアで精力的な創作活動を行ったエンブリアッチ工房に関連する作例であり、結婚に纏わる品と考えられるという。小箱本体の側面には宮廷人のカップルがぐるっと並び、あたかも横並びでダンスをしているようであり、蓋にはこの恋人たちを祝福するかの如く紋章を掲げる天使が舞っているのを観察することができた。愛を想起するテーマをもつ良質な工芸品が、宮廷生活の営みに欠かせない要素となってい

たことが理解できる作品であった。

さて本作はもちろん緑をテーマカラーとする「狩猟、王家の伝統行事」のパートに展示されていた。このパートの展示品は本作と、狩猟でしばしば使用されたクロスボウのみであり、ややさみしい印象が否めなかったが、解説パネルではこれを補うように中世の王家において狩猟が有した意味が記述されていた。即ち、「狩猟は領土に対する王の権力を象徴し、軍事的勝利や土地所有の概念にも関連するものである⁽¹³⁾」。後に改めて指摘するように、中世末期のフランス王たちは実際、王令によって身分に基づいた狩猟統制を進めており、狩猟は単なる娯楽に留まらず、神の代理人として所有地の統治を司る君主としての威信や権威の象徴ともなっていたのである。解説パネルではさらに、本展の主役であるフランス王ルイ11世が大の狩猟好きであったことにも触れており、豊かなシノンの森をしばしば訪ねたことが記されていた。これを踏まえると、本作はフランス王家と直接的な関連をもつ作例ではないものの、王がかつてこの地で好んで行った狩猟の情景を、また豪華な宮廷生活を映し出す鏡としての役割を展示室内で担っていると考えられた。また実見して驚いたのは、2020年のカタログに掲載された図版に比べ色彩が各段に鮮明だったことである。四辺の縁は摩耗が激しく損傷が甚だしいが、画面上部に生い茂る葉や衣裳に用いられる緑、中央の男性が被るシャブロンや人物の頬に差す朱色は特に鮮やかさを留めていることが確認できた。全展示品を見終わると、規模と質の点で際立っている本作が展覧会のキー・ヴィジュアルとして利用されているのも納得であった。

以上のように本展覧会は比較的小規模であり、また美術史というよりは史学、文化史よりの作品選定およびアプローチとなっていたが、15世紀

のヴァロワ王家と直接的な関連を有す展示環境が、あたかも時間旅行かのように企画内容への没入感を促し、所謂ホワイト・キューブの展示室で開催される美術展とは異なる魅力を創出していた。また、本作に関する新たな情報や知見の提示はなかったものの、チラシやインターネットで公開された展覧会情報でもメイン・ヴィジュアルとして使用されたことにより、15世紀のフランス・ヴァロワ王家の宮廷文化を代表する表象として、「狩猟」と「タピスリー芸術」が改めて強調されたと見做すことが可能であろう。実際、中世末期のフランスと南ネーデルラントでタピスリーが多数制作された背景に、ヴァロワ族のパトロネージがあったことはつとに知られており、しかも彼らが残した財産目録や支払名簿をみるならば、主題が狩猟に関連する作例を多数所有していたことが確認できるのである⁽¹⁴⁾。だが中世のタピスリーは、絵画や彫刻とはまた異なり、防寒、防湿の機能も備えた実用性が高い媒体であったがゆえに、その多くが失われてしまった。これに加えてタピスリーは、工芸品や応用芸術と見做される時代が長く続いたため、美術史研究においてなお多くの研究余地を残している領域となっており、中世の鷹狩りをテーマとする作品群の全体像も未だ不明である。そこで以下では、鷹狩りをテーマとする現存作例の基本情報を明らかにした上で、その図像変遷と本作の位置づけに関して考察を試みたい。

3. 西洋中世末期の鷹狩りのタピスリーの変遷と本作の位置づけ

筆者は、本作の図像上の特質を美術史的見地から考察するために、まずは14、15世紀制作の鷹狩り図像が見出される現存タピスリーの調査を行った。その結果をまとめたものが表1である。

この表からわかるように、14世紀の作例は見当たらず、15世紀の作例と思われるものは断片を含めて計17点である。無論、調査結果は現時点での暫定的なものであるが、本稿ではこの基本情報を拠り所として考察を進めることとする。

最初に注目するのは15世紀第1四半期の作例である。これらの作例では草木の生い茂る森を背景に優雅に着飾った宮廷人たちが描かれており、彼らのグローブをはめた手にはしばしば猛禽類が載っている。また、鷹狩りで用いるであろうこれらの猛禽類に餌を与えたり、水浴びさせたりと、世話をする様子が描出される一方で、実際に獲物を追わせる狩猟の実践は唯一《ロマンス》の「鷹狩り」(パリ, 装飾美術館; fig. 7; 作品番号②-1)にみられるのみで⁽¹⁵⁾、捕獲の瞬間や仕留めたあとの描写も見当たらない。このような15世紀第1四半期の作例における鷹狩り図像の特質から理解できることは、手懐けた猛禽類の存在は、登場人物が鷹狩りという高貴な狩猟を嗜む階級に属していることを示す一種のステータスシンボルとして機能しているということである。今回の展覧会でも強調されていたように、中世ヨーロッパにおいて狩猟は、王侯貴族の娯楽であると同時に彼らの権威を顕示するための重要な営みでもあった。なかでも中世末期のフランスでは、王令によって身分に基づいた狩猟統制が進められており、猟犬を伴い騎馬でシカやクマなどの大型獣を捕獲する「ヴェヌリー(仏: vénerie)」と、訓練したタカ科やハヤブサ科の猛禽類を使って鳥類や小動物を捕獲する「フォコスリー(仏: fauconnerie)」あるいは「シャス・オ・ヴォル(仏: chasse au vol)」と称される鷹狩りが、特権階級に相応しい高貴な狩猟と見做されていたのである⁽¹⁶⁾。15世紀第1四半期の作例に見出すことができる登場人物の社会的地位を象徴するモチーフとしての猛

【表 1】 15 世紀フランスおよび南ネーデルラント制作の鷹狩り図像を含むタピスリー一覧

作品情報は可能な限り現在の所蔵機関が公表している最新データを採用した。また筆者の実見調査に基づく情報を備考欄に記した。複数のタピスリーからなるシリーズものと見做されている作例には作品番号に枝番を使用した。

作品番号	作品タイトル	所蔵先	推定制作年	推定制作地	サイズ	素材	備考
1	① 《心の捧げ物》	パリ, ルーヴル美術館 OA3131	1400-1410年頃	パリ	高さ: 247cm 幅: 209cm	羊毛, 絹	直接的な鷹狩りの描写はないものの, 登場人物の1人の女性が腕に猛禽類を載せている。作品情報は以下に基づく。https://collections.louvre.fr/ark:/53355/cl010111577 (最終閲覧日 2023年10月9日)
2	②-1 《ロマンス》より「鷹狩り」	パリ, 装飾美術館 PE601	1400-1410年頃	パリ	高さ: 155cm 幅: 398cm	羊毛, 絹, 金銀糸	屋外での宮廷場面をテーマとする計5帳からなる《ロマンス》に属す作例。作品情報は以下に基づく。BLANC, M., <i>Tapisseries du Moyen Âge et de la Renaissance: Collection du musée des Arts décoratifs</i> , Paris, 2019.
3	②-2 《ロマンス》より「4人の宮廷人」	パリ, 装飾美術館 PE604	1400-1410年頃	パリ	高さ: 158cm 幅: 188cm	羊毛, 絹, 金銀糸	屋外での宮廷場面をテーマとする計5帳からなる《ロマンス》に属す作例。直接的な鷹狩りの描写はないものの, 登場人物の1人の男性が腕に猛禽類を載せている。作品情報は以下に基づく。BLANC, <i>op. cit.</i>
4	③ 《隼の水浴》	ニューヨーク, メトロポリタン美術館クロイスターズ 2011.93	1400-1415年頃	南ネーデルラント	高さ: 349.3cm 幅: 369.6cm	羊毛	鷹狩りで用いる猛禽類の訓練の一環として水浴をさせる場面が描かれている。近年発見された作品であり, 2011年にメトロポリタン美術館クロイスターズの所蔵品となった。作品情報は以下に基づく。https://www.metmuseum.org/art/collection/search/479495 (最終閲覧日 2023年10月9日)
5	④ 《隼の水浴》	ニューヨーク, メトロポリタン美術館 46.58.1	1400-1415年頃	南ネーデルラント	高さ: 304.8cm 幅: 296.6cm	羊毛	鷹狩りで用いる猛禽類の訓練の一環として水浴をさせる場面が描かれている。作品情報は以下に基づく。https://www.metmuseum.org/art/collection/search/468155 (最終閲覧日 2023年10月9日)
6	⑤ 《隼の水浴》	ニューヨーク, メトロポリタン美術館 43.70.2	1400-1415年頃	南ネーデルラント	高さ: 254cm 幅: 232cm	羊毛	鷹狩りで用いる猛禽類の訓練の一環として水浴をさせる場面が描かれている。CAVALLO (1993) は④と同じ下絵を反転させて織った作例と推察している。作品情報は以下に基づく。https://www.metmuseum.

西洋中世末期のタピスリーにおける鷹狩り図像の変遷

								org/art/collection/search/468080 (最終閲覧日 2023 年 10 月 9 日)
7	⑥	《隼を連れて た貴婦人》	ニュー ヨーク, メトロポ リタン美 術 館 43.70.1	1400-1415 年頃	南ネーデ ルラント	高さ: 259.1cm 幅: 170.2cm	羊毛	直接的な鷹狩りの描写はないものの、女性が腕に猛禽類を載せていることから本表に含めることとした。CAVALLO (1993) は、この女性像には作品④、⑤と同じ下絵が用いられていると推察している。作品情報は以下に基づく。https://www.metmuseum.org/art/collection/search/468079 (最終閲覧日 2023 年 10 月 9 日)
8	⑦-1	《デヴォン シャー公の 狩猟タピス リー》より 「鷹狩り」	ロンドン, V&A 美 術 館 T. 204-1958	1430-1440 年	アラス?	高さ: 445cm 幅: 1075.9cm	羊毛	計 4 帳からなる《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》に属す作例。ミネアポリス美術館所蔵の《鷹狩り》との類似が指摘されている。作品情報は以下に基づく。https://collections.vam.ac.uk/item/O94142/falconry-tapestry-unknown/ (最終閲覧日 2023 年 10 月 9 日)
9	⑦-2	《デヴォン シャー公の 狩猟タピス リー》より 「鵞と白鳥 狩り」	ロンドン, V&A 美 術 館 T. 204-1959	1430-1440 年	アラス?	高さ: 424cm 幅: 1118cm	羊毛	計 4 帳からなる《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》に属す作例。作品情報は以下に基づく。https://collections.vam.ac.uk/item/O73327/the-devonshire-hunting-tapestries-tapestry-unknown/ (最終閲覧日 2023 年 10 月 9 日)
10	⑦-3	《デヴォン シャー公の 狩猟タピス リー》より 「鹿狩り」	ロンドン, V & A 美術 館 T. 204-1960	1440-1450 年	アラス?	高さ: 409cm 幅: 808cm	羊毛	計 4 帳からなる《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》に属す作例。登場人物の衣装および植物の描写から、他の 3 帳よりやや後代の作例と推察されている。作品情報は以下に基づく。https://collections.vam.ac.uk/item/O94145/the-devonshire-hunting-tapestries-tapestry-unknown/ (最終閲覧日 2023 年 10 月 9 日)
11	⑧	《鷹狩り》	ミネアポ リス美術 館 15.34	1435-1445 年頃	フ ラ ン ス?	高さ: 342.9cm 幅: 325.76cm	羊毛	《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》との関連が推察されている作例。作品情報は以下に基づく。https://collections.artsmia.org/art/64/the-falconers-france (最終閲覧日 2023 年 10 月 9 日)
12	⑨	《鷹狩り》	ソミュ ール城美 術 館 (ノ ートルダ	1440-1450 年頃	南ネーデ ルラント	高さ: 158cm 幅: 209cm	羊毛, 絹	作品情報は以下に基づく。CREUXLEBOIS, L., PELLOQUET, T., <i>Parures de fête: Splendeurs des tapisseries</i>

西洋中世末期のタピスリーにおける鷹狩り図像の変遷

			ム・ド・ナンティイ教会からの寄託品)					<i>des collections de Saumur, Gand, 2020. 本作は『15世紀トゥレーヌにおける王家のたのしみ』展(2023)に出展され、筆者も展示会場にて実見することが叶った。糸のほつれや穴も多く、各辺が大きく切断されているが、青、緑、朱の色彩は特筆すべき鮮明さを留めている。また登場人物の装飾品の細部とマティエールの表現に製織の質の高さを看取することができた。</i>
13	⑩	《大狩猟タピスリー》	レーゲンスブルク旧市庁舎	1450-1460年	トゥルネー	高さ：467cm 幅：370cm	羊毛	直接的な鷹狩りの描写はないものの、女性が腕に猛禽類を載せていることから本表に含めることとした。作品情報は以下に基づく。 VON WILKENS, L., <i>Museum der Stadt Regensburg: Bildteppiche</i> , Regensburg, 1980.
14	⑪	《鷹狩り》	パリ, 装飾美術館 inv. 10476	1450年頃	南ネーデルラント	高さ：300cm 幅：190cm	羊毛, 絹	直接的な鷹狩りの描写はないものの、登場人物の1人の男性がクロスボウを携えていることから《鷹狩り》というタイトルがつけられているため、本表にも含むこととした。作品情報は以下に基づく。BLANC, <i>op. cit.</i>
15	⑫	《鷹狩り》	グラスゴー, バレル・コレクション 46.61	1475年頃	南ネーデルラント(おそらくブリュッセル)	高さ：322cm 幅：335cm	羊毛, 絹	筆者は2023年8月30日にグラスゴー・ミュージアムス・リサーチ・センターで本作の実見調査を行った。修復箇所や穴が僅かに散見されるものの保存状態は良好であり、特に裏面は鮮明な色彩を留め、完成当初は非常に質の高い豪華な作品であったと想像できた。作品情報は調査時に提供頂いた資料に基づく。
16	⑬-1	《鹿狩りでの出来事》より「城を出発する狩人たち」	ニューヨーク, メトロポリタン美術館 45.128.19	1495-1515年頃	南ネーデルラント	高さ：238.8cm 幅：198.1cm	羊毛	貴族による狩猟をテーマとする計5点の断片からなる《鹿狩りでの出来事》に属する作例。直接的な鷹狩りの描写はないものの、登場人物の1人の男性が腕に猛禽類を載せている。本作は16世紀に制作された可能性があるものの本表に含めることとした。作品情報は以下に基づく。 https://www.metmuseum.org/art/collection/search/468095 (最終閲覧日2023年10月9日)
17	⑬-2	《鹿狩りで	ニュー	1495-1515	南ネーデ	高さ：241.3cm	羊毛	貴族による狩猟をテーマと

	の出来事》より「狩猟からの帰還」	ヨーク, メトロポリタン美術館 45.128.24	年頃	ルラント	幅: 148.6cm	する計5点の断片からなる《鹿狩りでの出来事》に属する作例。直接的な鷹狩りの描写はないものの、登場人物の1人の男性が腕に猛禽類を載せている。本作は16世紀に制作された可能性があるものの本表に含めることとした。作品情報は以下に基づく。https://www.metmuseum.org/art/collection/search/468100 (最終閲覧日2023年10月9日)
--	------------------	---------------------------	----	------	------------	---

禽類は、このような当時の貴族階級による狩猟統制や受容の有様を反映しているとも捉えられる。タピスリーに猛禽類を伴う女性がみられるのも、実際に鷹狩りへの参加が女性たちにも認められていたゆえと解釈できるだろう。

15世紀第1四半期の作例に関してさらに指摘すべきは、《心の捧げ物》(パリ, ルーヴル美術館; fig. 8; 作品番号①) に代表されるように⁽¹⁷⁾、しばしば男女のカップルが中心となる登場人物となっている点である。このことは、狩猟を男女の恋愛の戯れや駆け引きの譬えや象徴とする、宮廷風恋愛のテーマを扱う中世の文学作品や造形作品の伝統を示唆していると考えられる⁽¹⁸⁾。『薔薇物語』を筆頭に、中世の文学作品の領域で男女の恋愛が繰り広げられる重要な場の一つが果樹園や庭園、また森であった。これらの作例に見出される、ときに愛らしいウサギが顔を出す森の風景は、豊饒な自然を恋愛の舞台と定める文学作品の系譜の視覚化とも捉えられるのである。

続いて、本作を含む15世紀第2四半期以降の作例を見渡すと、引き続き樹木が生い茂る屋外風景を背にした宮廷人による鷹狩りをテーマとしながらも、幾つかの作例では、より狩猟行為の実践的、具体的、さらに写実的な描写が登場することを確認することができる。

まず、その代表作例である計4帳からなる《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》のうち、1430年から1440年の制作とされる「鷹狩り」では、《ロマンス》にもみられたような、水鳥を追いかける猛禽類という鷹狩りの定型図像がみられる一方で、既に猛禽類によって捕獲されたあとの水鳥が登場する (fig. 9)。鷹狩りの名手と思しき男性は、隣に立つ朱色のドレスを纏う貴婦人に獲物を渡そうとしているが、獲物の腹には傷があり、血が流れ落ちる様子までが克明に描写されているのである。管見の限りでは、タピスリーにおける鷹狩りの場面で血が描かれるのはこの作品が最初である。

もう1点、テーマや構図、人物の衣裳等にも《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》と類縁性が指摘されている《鷹狩り》(ミネアポリス美術館; 作品番号⑧) は、1435年から1445年頃の制作と推察されているが、ここでは画面上部中央に、4羽の猛禽類により四方から追い詰められ、捕獲寸前の水鳥の描写をみつけることが可能である (fig. 10)⁽¹⁹⁾。空中で仰向けになった水鳥の上方には2羽の猛禽類が控えており、もはや逃れることは不可能であろう。定型的な鷹狩り図像からの脱却が認められるのである。

これら2点の作例と同時期かやや後に制作され

たと推察されている本作 (fig. 1) はというと、シャロンが述べたように、中世末期の世俗美術の一大テーマであった愛や宮廷風恋愛の図像伝統を継承していることは確かであろう。だが、猛禽類が獲物を捕獲する行為、つまり「狩り」それ自体の描写に注目するならば、やはり鷹狩りタピスリーの図像変遷における新機軸が現れていることが看取できるのである。かつて宮廷人の一種のアトリビュートとしてその手に留まっていた猛禽類は、本作では両翼を広げながら左上から急下降し、その嘴で今にも獲物の水鳥を掴み取ろうとしている (fig. 4)。獲物は敵をみようとして首をぐっと起こしながらどうにかこの場から逃がれようと画面右下方向へと下降している。追うものと追われるものが画面上で対角線構図を作り出すことで、追跡のスピード感が巧みに表現されているといえよう。

このような躍動感溢れる狩りの表現は、本作の下絵制作者の自然主義的な再現欲求が反映されているとも考えられるが、おそらく直接的あるいは間接的に、狩猟術が詳述される狩猟書のテキストおよびその挿絵が影響を与えていると推察できる。本稿では下絵画家の同定と具体的な図像源泉の考察に立ち入ることはできないが、例えば14世紀世紀フランスで成立した鷹狩りの手引き書であるノルマンディー貴族アンリ・ド・フェリエールによる『モデュス王とラティオー王妃の書』は、15世紀においてもなお豪華写本として制作され続けており、本作の製織地と推察される南ネーデルラントでも受容されていたことが分かっている⁽²⁰⁾。これら狩猟書のテキストで語られる具体的な狩猟術と施された挿絵を、タピスリーの下絵制作者、あるいは彼が使用した図案の制作者が参照することによって、よりリアルな狩りの場面が創案された可能性は十分考えられるだろう。

いずれにせよ本作は、中世末期のタピスリーにおける鷹狩り図像の変遷において、15世紀中葉に至り、新たな写実的傾向をみせる作例の一つとして位置づけることができるのである。興味深いことに、《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》のうち、1440年から1450年に制作されたと推察されている「鹿狩り」(作品番号⑦-3)では、ついに仕留めた獲物の上に乗る猛禽類が登場し、さらに半世紀以上を経て1515年から1535年に南ネーデルラントで制作された《ハンティング・パークス・タピスリー》の「猛禽類と弓による鳥狩り」(ニューヨーク、メトロポリタン美術館41.190.228)では⁽²¹⁾、まさにいま獲物に襲い掛かる猛禽類の姿が捉えられており (fig. 11)、鷹狩り図像の次なる段階を垣間見ることが可能である。

実は、こうした鷹狩りタピスリーの「狩り」そのものの描写における写実性への志向は、中世の特権階級が盛んに行ったもう一つの狩猟法、即ち「ヴェヌリー」と称される猟犬を伴って騎馬で行う狩りをテーマとするタピスリーの図像変遷にも見出すことが可能である。筆者は以前、《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》のなかで最も推定制作年代の早い1425年から1430年頃の作例とされる「クマとイノシシ狩り」の図像に注目し、中世末期の「ヴェヌリー」の図像変遷という観点からその特徴を考察した⁽²²⁾。その結果、ここにみられる流血を伴う人とクマと猟犬の戦闘場面は、タピスリーという媒体はもちろんのこと、狩猟場面を含む写本画の歴史においても、狩猟という行為が本来有す暴力性や残酷さが忌憚なく活写される先駆的作例の一つであることが明らかになったのである。1440年から1450年に制作された鷹狩りをテーマとする本作の図像にも、同様の傾向を看取することができるといえよう。

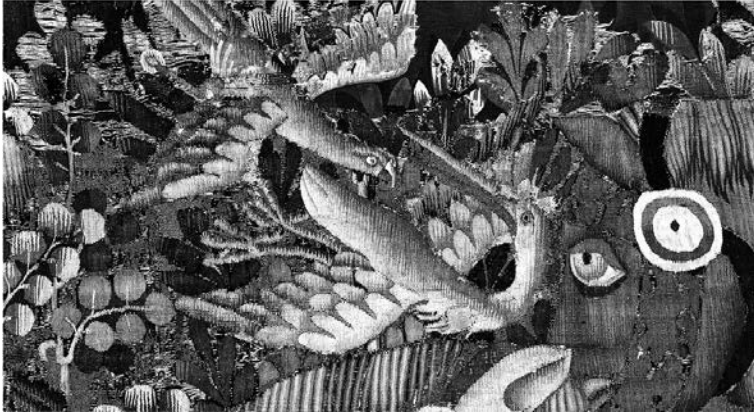


fig. 4 fig. 1 の部分拡大図



fig. 5 ル・カロワ美術歴史博物館 (2023年9月撮影)



fig. 6 《愛の小箱》, 北イタリア, 14世紀末から15世紀初頭, 象牙製の小箱, ソミュール城美術館



fig. 7 《ロマンス》より「鷹狩り」(部分), パリ, 1400-1410年頃, タピスリー, 155 x 398cm, パリ, 装飾美術館



fig. 8 《心の捧げ物》, パリ, 1400-1410年頃, タピスリー, 247 x 209cm, パリ, ルーヴル美術館



fig. 9 《デヴォンシャー公の狩獵タピスリー》より「鷹狩り」(部分), アラス?, 1430-1440年, タピスリー, 445 × 1075.9cm, ロンドン, V&A 美術館



fig. 10 《鷹狩り》(部分), フランス?, 1435-1445年頃, タピスリー, 342.9 × 325.7cm, ミネアポリス美術館



fig. 11 《ハンティング・パークス・タピスリー》より「猛禽類と弓による鳥狩り」(部分), 南ネーデルラント, 1515-1535年, タピスリー, 342.9 × 325.7cm, ニューヨーク, メトロポリタン美術館

以上の考察を踏まえて改めて留意すべきは、本作の図像における写実的傾向は、あくまでも細部に留まっているという点である。断片ではあるが、本作の画面構成や空間表現は、同時代の絵画芸術と比すと保守的であり、むしろ一世代前の国際ゴシック期に宮廷遊楽図を描く際に使用された平面的な〈綴れ織り風景〉を基盤としていることがわかる⁽²³⁾。つまり本作は、テーマおよび構図の点では中世の典雅な宮廷美術の伝統を継承しつつ、鷹狩りの描写に真実味が立ち現れている点の特徴となっているのである。それは、宮廷の室内装飾というタピスリーが担う役割ゆえに選択された、絵画芸術とはまた異なる、タピスリー独自の造形的特徴といえるだろう。

おわりに

本稿では、『15世紀トゥレーヌにおける王家のたのしみ』展を機に、今一度、ソミュール城美術館の《鷹狩り》の研究史を振り返り、その上で、中世末期のタピスリーにおける鷹狩り図像の変遷という観点から本作の図像的特質の考察を試みた。その結果、本作は、宮廷人による鷹狩りというテーマと基本的な構図の点では中世末期の宮廷美術で育まれた伝統を踏襲している一方で、狩りそのものの描写には、より現実的且つ写実的な表現が現れていることが浮き彫りになった。そして、この狩猟場面におけるリアリズムへの志向は、ほぼ同時期に制作された「ヴェヌリー」の図像をもつタピスリーにも看取でき、さらにこののちの狩猟タピスリーを見渡すと、狩猟という行為が本来有す残酷さや暴力性を忌憚なく活写する流れが存在することを確認できるのである。よって本作は、鷹狩りを含む狩猟タピスリーの変遷において、その図像に新機軸が現れ始める過渡期の作

例の一つとして位置づけることが可能である。

一方、本作の所有者と制作経緯の解明に関しては、取り外された紋章断片が鍵になると思われる。というのも、シャロンがこの紋章の主の可能性があると考えたジャック・ド・ディナン＝モンタフィランは、フランス王家の執事長を務めると共に、ジャンヌ・ダルクの同胞として百年戦争を戦った人物である。実は、筆者が以前研究対象とした、同じくノートルダム・ド・ナンティイー教会所蔵の中世末期のタピスリー《野人の舞踏会》の注文主として、筆者は、同じくジャンヌ・ダルクの同胞として名を連ね、フランス国内でも指折りの広大な領地を支配した大貴族、トゥアール子爵のルイ・ダンボワーズ (Louis d'Amboise) を有力視しているのだ⁽²⁴⁾。今回の展覧会でも、15世紀のヴァロワ王家による狩猟熱と共に、タピスリー芸術への愛着が改めて印象付けられることとなったが、ジャンヌ・ダルクおよびヴァロワ王家を起点とした人的紐帯と現存タピスリーとの関係を紐解いてゆくことで、15世紀フランスの宮廷におけるタピスリー受容の実態、ひいては15世紀フランス美術の中でタピスリーが有した独自の意義と役割が浮き彫りになることが期待できるのである。

【附記】 本稿は JSPS 科研費 20K12859, 23K00154 の助成を受けたものです。作品調査では各研究機関、とりわけグラスゴー・ミュージアムズ・リソース・センターの皆様にご高配を賜りました。末筆ながらここに記して心よりお礼申し上げます。

【註】

- (1) シノン城に関しては以下を参照。HOUVENAGHEL, F., *Le château de Chinon au fil du temps*, Paris, 2016.
- (2) 本作に関しては以下を参照。LESTOCQUOY, J., *Deux siècles de l'histoire de la tapisserie (1300-1500): Paris, Arras, Lille, Tournai*,

- Bruxelles*, Arras, 1978, pp. 49-54; DIGBY, G. F. W., *The Tapestry Collection: Medieval and Renaissance*, London, 1980, pp. 35-44; 服部照子『ヨーロッパの生活美術と服飾文化1 ゴシックタピスリーと服飾』源流社, 1986年, 14, 200頁; CREUXLEBOIS, L., PELLOQUET, T. (eds.), *Parures de fête: Splendeurs des tapisseries des collections de Saumur*, Gand, 2020, pp. 74-81; VACQUET, E., "La restauration des tapisseries de Saumur: Bilan de 25 ans de travaux. Patrimoines en Anjou", 2020 (<https://hal.science/hal-03084426/document>: 最終閲覧日 2023年10月16日).
- (3) 《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》に関しては拙稿「中世末期フランスおよび南ネーデルラントにおける狩猟タピスリー——《デヴォンシャー公の狩猟タピスリー》の「熊と猪狩り」を中心に——」『Aspects of Problems in Western Art History』, 19, 2021年, 7-22頁を参照。
- (4) 西洋中世, 特にフランスおよび南ネーデルラントのタピスリーに関しては主に以下を参照。KURTH, B., "Die Blütezeit der Bildwerkerkunst zu Tournai und der Burgundische Hof", *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen des Allerhöchsten Kaiserhauses*, 34, 1918, pp. 53-110; KURTH, B., *Gotische Bildteppiche aus Frankreich und Flandern*, München, 1923; GÖBEL, H., *Wandteppiche, I, Die Niederlande*, Leipzig, 1932; D'HULST, R. A., *Tapisseries flamandes du XIV^e au XVIII^e siècle*, Bruxelles, 1960; SALET, F., SOUCHAL, G., *Chefs d'œuvre de la tapisserie du XIV^e au XVI^e siècle*, cat. exp., Paris, 1973; VERLET, P., FLORISOONE, M., HOFFMEISTER, A., TABARD, F., *The Book of Tapestry: History and Technique*, New York, 1978; LESTOCQUOY, *op. cit.*; DIGBY, *op. cit.*; 服部, 前掲書; CAVALLO, A. S., *Medieval Tapestries in the Metropolitan Museum of Art*, New York, 1993; JOUBERT, F., BERTRAND, P. F., LEFEBURE, A., *Histoire de la tapisserie: En Europe du Moyen Âge à nos jours*, Paris, 1995; CAMPBELL, T. P., *Tapestry in the Renaissance: Art and Magnificence*, New York, 2002; 木島俊介著, 小池寿子編『女神たちの変身 中世タピスリーに見る女性像の変遷』「木島俊介先生の傘寿を祝う会」事務局, 2021年; 拙稿, 2021年; 拙稿「ソミュール城の〈野人のタピスリー〉をめぐると一試論」『Aspects of Problems in Western Art History』, 20, 2022年, 19-35頁。
- (5) CREUXLEBOIS, PELLOQUET, *op. cit.*, pp. 74-81.
- (6) 〈綴れ織り風景〉または〈タピスリー (タペストリー) 風景〉という用語は越宏一氏によるものである。越宏一『風景画の出現 ヨーロッパ美術史講義』岩波書店, 2004年, 特に65-69頁。またベヒトもこのような画面構成を示す環境表現を「tapestry's landscape」と称している。PÄCHT, O., "Early Italian Nature Studies and the Early Calendar Landscape", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 13, no. 1/2, 1950, p. 39, note. 2.
- (7) 鷹狩りの道具や専門用語に関しては以下が詳しい。DE CHAMERLAT, C. A., *La fauconnerie et l'art*, Paris, 1986.
- (8) DIGBY, *op. cit.*, pp. 35-44.
- (9) CREUXLEBOIS, PELLOQUET, *op. cit.*, pp. 74-81.
- (10) 中世末期の世俗美術における愛の図像に関しては以下を参照。VAN MARLE, R., *Iconographie de l'art profane au Moyen-Âge et à la Renaissance, et la décoration des demeures. II. Allégories et Symboles*, La Haye, 1932, pp. 415-496; CAMILLE, M., *The Medieval Art of Love: Objects and Subjects of Desire*, London, 1998.
- (11) 三部会とはフランスの身分制議会で, 基本的には聖職者, 貴族, 有力都市の市民階級 (第三身分) の3部から構成される。
- (12) 中世における旅に関しては特に以下を参照。関哲行『旅する人びと (ヨーロッパの中世4)』岩波書店, 2009年。
- (13) 展示パネルより拙訳。
- (14) 現存作例が希少ななか, ヴァロワ一族を中心とする特権階級が残した財産目録や支払調査は, 所有したタピスリーの数や主題に関する情報を提供してくれる。例えばブルゴーニュ公ジャン無畏公が1420年に逝去した際に制作された目録には, 「金糸で織られた9帳の大型タピスリーと2帳の小型タピスリーには, 千鳥や鶉に対する鷹狩りが表され, そこには故ジャン公と公爵夫人が徒歩および馬上姿でいる」という記述をみつけることができ, ヴァロワ・ブルゴーニュ公家に大型の鷹狩りタピスリーが存在していたことが確認できる。GUIFFREY, J., MÜNTZ, E., PINCHART, A., *Histoire générale de la tapisserie*, 3, Paris, 1884, pp. 23-24 (<https://bvpp.mcu.es/en/consulta/registro.do?id=483287>: 最終閲覧日 2023年10月16日)。シャロンも15世紀以降のタピスリーにおける狩猟のテーマの人気を指摘している。CHARRON, P., "Les grandes collections françaises: Une histoire de la permanence", MASSIN LE GOFF, G., VACQUET, E. (dirs.), *Regards sur la tapisserie*, Angers, 2002, pp. 43-59.

- (15) 本作に関しては以下を参照。BLANC, M., *Tapisseries du Moyen Âge et de la Renaissance: Collection du Musée des Arts décoratifs*, Paris, 2019, pp. 88-95.
- (16) 中世の狩猟および狩猟術を扱う著作に関しては以下を参照。STRUBEL, A., DE SAULNIER, Ch., *La poétique de la chasse au Moyen Âge: Les livres de XIV^e siècle*, Paris, 1994; PARAVINCI BAGLANI, A., VAN DEN ABEELE, B. (eds.), *La chasse au Moyen Âge: Société, traités, symboles*, Sismel, 2000; SMETS, A., VAN DEN ABEELE, B., “Medieval Hunting”, *A Cultural History of Animals in the Medieval Age*, New York, 2007, pp. 59-79, 210-215; 拙著『ガストン・フェビュスの『狩猟の書』挿絵研究』中央公論美術出版, 2020年。この他、頼頼子氏が中世末期から近世までを射程にして狩猟書の受容に関する研究を継続的に発表されている。
- (17) 本作に関しては以下を参照。TABURET-DELAHAYE, È, et al., *Paris 1400: Les arts sous Charles VI*, cat. exp., Paris, 2004, p. 228; 木島, 前掲書, 124-133頁。
- (18) 「宮廷風恋愛(仏: amour courtois)」とは南仏の抒情詩人トルバドゥールが謳った「フィナモール(仏: fin'amor)」を起源とする中世の文芸作品における重要なテーマである。その定義に関しては諸説あるが通常は騎士による意中の女性に対する絶対的な恋愛奉仕を指す。宮廷風恋愛に関しては以下を参照。LEWIS, C. S., *The Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition*, Clarendon, 1936 [C・S・ルイス『愛とアレゴリー: ヨーロッパ中世文学の伝統』玉泉八州男訳, 筑摩書房, 1972年]; 松原秀一「中世仏文学の恋愛観と女性像」『藝文研究』, 19, 1965年, 56-64頁; BUMKE, J., *Höfische Kultur: Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter*, 2 Bde., München, 1987 [J・ブムケ『中世の騎士文化』平尾浩三他訳, 白水社, 1995年]; ジュリー・ブロック「フランス文学に見る恋愛観: 12世紀から18世紀前半まで」『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告』, 52, 2003年, 161-198頁; 原昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社, 2007年; ABBASSA, M., “Les Sources de l'amour courtois des troubadours”, *Annales du patrimoine*, 8, 2008, pp. 7-14.
- (19) 本作に関しては以下を参照。ADELSON, C. J., *European Tapestry: In the Minneapolis Institute of Arts*, Minneapolis, 1994, pp. 22-35; <https://collections.artsmia.org/art/64/the-falconers-france> (最終閲覧日 2023年10月16日)。
- (20) 『モデウス王とラティオー王妃の書』の写本に関しては主に以下を参照。TILANDER, G., *Les livres du roy Modus et de la royne Ratio*, Paris, 1932; VAN DEN ABEELE, B., *La fauconnerie dans les lettres françaises du XII^e au XIV^e siècle*, Leuven, 1990; PAGENOT, S., *Recherches sur l'iconographie profane à la fin du Moyen Âge: les premiers traités de chasse enluminés* (“Livre du roy Modus et de la royne Ratio” de H. de Ferrières, “Livre de chasse” de Febus), thèse de doctorat, Université de Paris IV-Sorbonne, 2009, 4 vols; VAN DEN ABEELE, B., *Texte et image dans les manuscrits de chasse médiévaux*, Paris, 2013, pp. 65-94. 特に受容に関しては頼頼子氏「中世後期～近世初頭における一四世紀フランスの狩猟書の受容」『鷹陵史学』, 44, 2018年, 17-31頁を参照。
- (21) 本作に関しては以下を参照。CAVALLO. *op. cit.*, pp. 574-585; <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/467961> (最終閲覧日 2023年10月16日)。
- (22) 拙稿, 2021年。
- (23) 例えば国際ゴシックを代表するランブル兄弟の『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』(シャンティイー, コンデ美術館)の「8月」でも平面的な〈綴れ織り風景〉を背にした宮廷人たちの狩りへの出発が描かれている。
- (24) 拙稿, 2022年。

[図版出典]

CREUXLEBOIS, PELLOQUET, *op. cit.* (figs. 1-4) / 筆者撮影 (figs. 5-6) / BLANC, *op. cit.* (fig. 7) / TABURET-DELAHAYE, *op. cit.* (fig. 8) / WOOLLEY, L., *Medieval Life and Leisure in the Devonshire Hunting Tapestries*, London, 2002 (fig. 9) / ADELSON, *op. cit.* (fig. 10) / <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/467961> (fig. 11)